

第7回世界のウチナーンチュ大会

今 林 直 樹

はじめに

2022年10月31日から11月3日にかけて「第7回世界のウチナーンチュ大会」が開催された。同大会は1990年の第1回大会からほぼ5年ごとに開催されてきた。第7回大会は、本来であれば、2021年に開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行によって開催を見送り、翌22年に延期となった。そのため、1972年の沖縄の日本復帰から50周年という記念の年と重なった。

筆者は、11月3日、同大会最終日に沖縄に入り、当日開催されていたイベントと閉会式・グランドフィナーレに参加した。本稿はその報告であるとともに「世界のウチナーンチュ大会」に関する覚書としてまとめたものである。

なお、本稿では主として「沖縄タイムス」10月26日号、10月31日号、11月4日号、「琉球新報」11月4日号の記事を参考にまとめている。以下、本稿では引用元を明記する場合、それぞれを「沖縄 10.26」「沖縄 10.31」「沖縄 11.4」「琉球 11.4」と略記する。それら以外については、本文中に示す。

1. 「移民県」沖縄

(1) 前夜祭パレード

大会開会を翌日に控えた10月30日、那覇市の国際通りで前夜祭パレードが開かれた。参加したのは13か国・26都市から1600人、国内8県人会から400人、県内国際交流協会から14団体600人、一般募集参加者400人の計約3000人であった。式典では、玉城デニー沖縄県知事が「本日は世界のウチナーンチュの皆さまとの最初の交流の場。『まっちょーたんどー』と声をかけ、チムグクルで温かくお迎えしましょう」と呼びかけ、県系3世で米国ハワイ州のデービッド・イゲ知事は「この場に來られたことに感謝する。一生忘れない、かけがえのない思い出になるでしょう」とあいさつした（「沖縄 10.31」）。沿道に集まった大勢の県民から「おかえり」の声がかけられた。ボリビア2世で、父が具志頭出身の喜久山美香さんは、32年ぶりに沖縄に帰ってきたが、「国際通りを歩いて『おかえり』と声をかけられた時、胸がきゅっと締め付けられた」と語っている（「沖縄 11.4」）。

「沖縄 10.31」の記事から「世界のウチナーンチュ」の方々の反応を見よう。

① ハワイ

「アロハー」。ハワイ沖縄連合会らメンバーはハワイ諸島8島が描かれた鮮やかな緑色のポロシャツを着て、ウクレレや三線、フラを披露しながら練り歩いた。

パレード直前、元同連合会長で県系2世のジョージ玉城さん(84)は「この大会は沖縄に帰ってきたことを肌で感じられる」と興奮した様子。左腕にハワイの伝統的な入れ墨を入れている県系3世のタリマ・カナカオレさん(35)は「沖縄は誇りの場所だ」と話した。

県系3世のシャーロット・カバリオさん(69)は「祖父母が見た100年前の景色とは変わっているけど、時間がたってもルーツが沖縄であることは変わらない」と胸を張る。

②ブラジル

サンバの明るいリズムに指笛を鳴らし、ひときわ沿道を盛り上げたブラジル沖縄県人会。黄色と緑のブラジル国旗のTシャツやユニホームに身を包んで行進。沿道からの「お帰り」の声に笑顔で応えた。(中略)

曾祖父の出身地・西原町で研修している吉原ラリサ美幸さん(36)は、大会は初体験。「想像していたよりもすごい。感動していますと声を弾ませた。金城ビアンカさん(25)も「いろんな国にウチナーンチュがいる。不思議な気持ち」と目を見張った。

8歳で当時コザ市からブラジルへ渡った島袋栄喜さん(71)は「世界中のウチナーンチュの心が一つになるつながりを感じられた」とほほ笑んだ。

③アジア

アジアからはタイやシンガポール、韓国などの県系人が大会にやって来た。

沖縄インドネシア友好協会などの人たちは伝統音楽「ガムラン」の演奏に合わせ、紅型の生地を交ぜた鮮やかな衣装で登場。この日のためにアレンジしたバリ舞踊を披露し、華やかな演舞で観客を沸かせた。

親子4人で韓国の伝統衣装「ハンボック」に身を包んで行進した大城クリスティーナさん(47)＝ブラジル出身＝は、夫の母国の韓国で暮らしている。海外にいても「県系人はイチャリバチョーデーですぐに仲良くなるので温かい」。大会を通して「海外の県人会とも交流を持ちたい」と胸を躍らせた。

④北米

北米から参加した県系人は「シカゴ」「アトランタ」などと自分が住む州の名前を連呼し、アピールしながらパレードした。サルの仮面をかぶった参加者が、沿道の子どもやお年寄りとハイタッチやハグをしながら盛り上げた。

ロサンゼルスに拠点を置く北米沖縄県人会のエドワード神谷会長(71)は「ここにいるみんなが同じスピリットを持った家族に思える。これからもロスから沖縄をサポートしていきたい」と目を細めた。(中略)

サクラメント沖縄県人会のはるみ・ドゥシャームさん(70)は「私にとって沖縄は世界の真ん中」と胸を張った。

上記の記事について、時間軸と空間軸の2つの点からまとめることができるであろう。

第1に、時間軸である。沖縄から初めて海外に移民が渡ったのは1889年12月のことであった。金武町出身で、後に「移民の父」と呼ばれた當山久三の導きによって26名がハワイへと旅立っていった。それからすでに130年以上が経ち、沖縄系移民も3世から5世を中心とした世代へと移り変わっている。しかしながら、彼らが沖縄を「故郷」とする気持ちにはいささかの変化もない。むしろ、世代を超えて継承され、増幅された「郷愁」(ノスタルジー)によって沖縄への思いはさらに強くなったようにも思われる。とくに、後述するとおり、琉球/沖縄文化、とりわけ三線に代表される文化の若い世代への継承によって、沖縄への郷愁は世代を超えて受け継がれていったと言えるであろう。

第2に、空間軸である。これについては、繰り返しになるが、沖縄系移民は北米・ハワイをはじめ、南米のブラジル、アルゼンチン、ペルー、ボリビアなど、アジアでは中国や韓国、シンガポールなど、そしてヨーロッパではフランスなどにも移民している。文字通り「世界のウチナーンチュ」たちが、全世界を股にかけて「越境的ネットワーク」を構築しているのである。この「越境的ネットワーク」は、例えば、1945年の沖縄戦により、経済的に困窮した事態に陥った際、ハワイの沖縄系移民たちが沖縄に550頭もの豚を送ったというよく知られたエピソードにも現れている。そして、それは沖縄で「相互扶助」を意味する「ゆいまー」精神のなせる業であった。すなわち、移民元である沖縄と移民先である海外の国々や地域との間には目には見えないが切り離すことのできない「ウチナーンチュ」という紐帯が築かれているのである。

まさに、上記のような時間軸と空間軸によって構築された世界こそ、まさに「世界のウチナーンチュ大会」の基盤となるものであった。

(2) 「世界のウチナーンチュの日」

ところで、上記「前夜祭パレード」が開催された10月30日は「世界のウチナーンチュの日」であった。これは、前回第6回大会の閉会式で、当時の翁長雄志知事によって制定を宣言されたものである。提唱者はアルゼンチン沖縄系2世の比嘉アンドレスさんとペルー沖縄系3世の伊佐正アンドレスさんである。両氏は、2019年、ハワイで開催された第59回海外日系人大会で制定が宣言された「国際日系デー」(6月30日)の提唱者でもある。両氏については、「独立行政法人国際協力機構 横浜センター 海外移住資料館」が発行している『海外移住資料館だより』(No.59)で紹介されている。以下、同誌に基づいて、両氏について紹介していきたい。

比嘉アンドレスさんは、1974年にアルゼンチンに生まれた2世である。顔写真と氏名が掲載されている箇所のキャプションによれば、比嘉さんはJICA沖縄を拠点にUNCウチナーネットワークコンシェルジュ(沖縄県委託事業)として国際交流活動を行っているという。比嘉さんにとって、沖縄は「日常」であったという。インタビューで次のように語っている。

両親はふたりとも沖縄生まれ、私はアルゼンチン生まれの2世です。フローレンシオバレーラという小さな町で育ちましたが、沖縄移民が多く、人付き合いや食事など日常の中に沖縄がありました。どこの家に行っても沖縄式の仏壇があるとかね。私にとって沖縄は、ぜんぜん遠い場所ではなかったですね。

日本には学費を稼ぐための出稼ぎとして訪れ、福島から北九州まで日本各地で働いたという。そして、最後に訪れたのが沖縄であった。比嘉さんは次のように語っている。

最後に沖縄に寄ってみようということで、親戚訪問とお墓参りのために2週間の予定で沖縄に来ました。2週間が1カ月になり、3カ月、半年と時間が流れるにつれて、沖縄がどんどん好きになりました。将来、沖縄のために、そして海外にいるウチナーンチュの仲間のために何かできないかなと思うようになりました。

伊佐正アンドレスさんは、1990年にペルーで生まれた3世である。同じく紹介のキャプションによれば、伊佐さんは名桜大学国際交流課職員として勤務する傍ら、ラテンダンスの講師としてワークショップ等を主宰している。伊佐さんは自身が沖縄に来るまで沖縄についてほとんど何も知らなかったとして、次のように語っている。

父方の祖父母が沖縄出身で、戦前にペルーに移民しました。母は非日系のペルー人です。沖縄に来るまで、沖縄についてほとんど何も知りませんでした。ペルーでは祭りでよくエイサーを踊りますが、沖縄に来てそれが沖縄の文化だったということをはじめて知ったくらいです（笑）。

伊佐さんが沖縄とつながったのは、1年間の留学プログラムで名桜大学に来た時であった。プログラムが終わったらペルーに帰るつもりだった伊佐さんが沖縄に残った背景について、次のように語っている。

沖縄ではすべてが未知の世界でしたが、本当に温かく受け入れられて、そのおかげでホームシックもなく、どこカラテンの空気と似ているところもあって、本当に居心地のいい場所だなと思いました。沖縄の歴史や文化を学ぶうちに、将来は沖縄に残って生活したいという気持ちが強くなりました。1年間のプログラム終了後、試験を受けて名桜大学に正式に入学し、卒業してから現在まで名桜大学で働かせてもらっています。

伊佐さんが比嘉さんと出会ったのも名桜大学であった。そして、二人は前回大会で「世界中のウチナーンチュが心から祝える日をつくりたい」と提言し、それを受けて当時の大会実行委員会会長であった翁長雄志県知事とともに閉会式に登壇し、ウチナーンチュの温かさや誇りをうたった宣言文を交互に読み上げた。沖縄セルラースタジアムのスタンド席を埋め尽くした約1万5千人は大きな拍手で承認したという（「沖縄10.26」）。今回の「世界のウチナーンチュの日」にあたり、比嘉さんは「『世界のウチナーンチュの日』は、沖縄よりむしろ海外で知られている」と指摘し、「コロナの影響で交流が難しい期間が続いた。6年ぶりの大会を通して、世界のウチナーンチュみんながアイデンティティを再確認するきっかけになれば」と期待しているという（「沖縄10.26」）。

先述のとおり、「世界のウチナーンチュ大会」の基盤となっているのが、沖縄が持つ時間軸と空間軸であった。このことは、先の比嘉、伊佐両氏の「世界のウチナーンチュの日」という試みにも確認することができる。「世界のウチナーンチュ大会」と「世界のウチナーンチュの日」が一体となって沖縄のさらなる可能性を広げていくことを願ってやまない。

2. 第7回「世界のウチナーンチュ大会」

(1) キャッチフレーズとイベント

第7回大会のキャッチフレーズは「うちなーのシンカ、今こそ結ぶ世界の輪」であった。大会のキャッチフレーズは海外や県内外からの応募作品311の中から選ばれた。作者は眞榮城佳名恵さんである。制作者のコメントによると、「シンカ」とは沖縄の方言で「仲間」という意味があるという。そこに、「世界のウチナーネットワークを担うシンカこそが真の価値」、すなわち「真価」であること、そして、コロナ禍において人との繋がりが求められる今こそ大会を通じて世界のシンカ同士の輪を結び、さらなる発展を遂げることができるとのメッセージを込めたということである。

大会期間中、開催されたイベントは「開会式」に始まり、「はいさいステージ」「カルチャーワークショップ」「県人会長・ウチナー民間大使会議」を経て「閉会式・グランドフィナーレ」で閉幕となった。大会に先立って、「第7回世界若者ウチナーンチュ大会 沖縄・2022」（10月27日～29日）、「おきなわ国際協力・交流フェスティバル2022」（10月29日）なども開催されている。

また、10月30日から11月30にかけて開催された「ワールド三線フェスティバル2022」も忘れてはならないであろう。今大会の関連イベントとして「綾なすしまくとぅばと歌三線」が「はいさいステージ」で開催され、あらためて「三線文化」が「しまくとぅば」とともに、ウチナーンチュのアイデンティティー継承の象徴となっていることが確認できた。しかし、同時に課題もあるという。すなわち、三線の人気は県外や国外で高まっているものの、県内の若年層は減少し、うちなーぐちを話せる人も年々少なくなっていて、このままでは三線文化が揺らぎかねないとの懸念が業界で高まりつつあるとのことである（「沖縄10.26」）。こうした状況を受けて、県三線製作事業協同組合の仲嶺幹事務局長は「三線文化をつくっていく新たなスタートでもある。世界から集まる人に、聞いて見て触れて楽しんでもらいたい」「沖縄は三線の聖地。フェスティバルを機に人材育成や文化の継承に力を入れ、地域を盛り上げていきたい」と語っている（「沖縄10.26」）。

「世界のウチナーンチュ大会」のきっかけを作ったと言われるのが琉球新報社編の『世界のウチナーンチュ』である。そのハワイ編には「一世で沖縄から三味線を大事に持ち込んだ人が少なくない。激しい昼間のキビ労働で疲れた体に、古里の三味線は唯一の慰めになった。多民族社会の中で県人らの“自己証明”になったのが琉球芸能であった」とあ

る。三線は「沖縄の心」とも言われるが、それは移民とともに海を渡り、現地で継承されていく中で沖縄のアイデンティティーの象徴となっていったのである。「綾なすしまくとぅばと歌三線」のステージではアルゼンチンやブラジル、ハワイだけでなく、台湾やカナダ、ロンドン、シアトル、パリなどで三線文化が普及していることが映像とともに紹介されていたが、三線文化が「自己証明」としての役割を超えて、あるいは「沖縄系」という枠を超えて、それ自体が持つ魅力が国境や地域を超えて共有されるに至ったのであろう。

この「ワールド三線フェスティバル」は5年に一度の「世界的な三線の祭典」として今後も継続することを目指すという。国内外、県内外で三線文化が普及すること、何よりも県内で、そしてより若い世代に一層普及していくことを願ってやまない。

(2) 閉会式とグランドフィナーレ

閉会式では、岡田直樹沖縄担当相、玉城デニー大会実行委員会会長・沖縄県知事の挨拶とともに、吉村尊雄さん（ブラジル）は次世代代表として、小橋川ラウルさんはペルー県人会会長として挨拶をした。「沖縄 11.4」から吉村さんと小橋川さんの挨拶を見ておこう。

①吉村尊雄さん

開催に携わった関係者の皆さま、イッペーニフェデービル。沖縄市美里出身の父と八重山白保出身の母が移民としてブラジルに渡った。私は幼少期、おばーと一緒に沖縄の歌や踊りを楽しみ先祖の島に思いを膨らませた。ブラジルで26年前、14歳から三線を始めた。通信の発展で電話やSNSで沖縄と情報交換が可能になり、沖縄を近くに感じるようになった。

これからの沖縄とウチナーンチュの明るく栄えある未来のために、世界のウチナーンチュも共にあることを忘れず、これからも大会が開催されることを願っている。

②小橋川ラウルさん

新型コロナウイルスのような感染症に立ち向かうことになるとは、誰も想像しなかった。何が起きても、私たちの人生は続く。

ウチナーンチュとして勤勉に働き、代価をいとわず正直に生き、連携して感謝を忘れず前に進む。先祖が教えてくれた価値観だ。そのおかげで、私たちは世界から認められている。

ここに来ると「わが家に帰ってきた」と感じる。世界で一番のおもてなしをありがとう。ルーツを再発見し、これまで以上にウチナーンチュだと感じる。子どもやその子どもたちに、沖縄への愛を伝えていく。

こうした故郷沖縄への思いとウチナーンチュとしての誇りが言葉として示されたのが「大会メッセージ」であろう。ウチナージュニアスタディーツアー参加者の平田菜乃華さんと知念パブロ明さんによるメッセージを、その一部であるが、これも確認しておきたい。

「大会メッセージ」

私たちウチナンチュは、目には見えない固い絆で結ばれています。だから、私たちは5年後にまた必ず会えるでしょう。

わたしたちウチナンチュは、やわらかな心を持っています。だから、どこにいても「平和の緩衝」の役割を担うことができます。

わたしたちウチナンチュは、つよい心を持っています。だから、どこにいても「困難を乗り越える」ことができます。

私たちの祖先が「万国津梁の精神」を握りしめ海を越えた、あの日からずっと。そして、これからもずっと。

やはり、ここで強調しておきたいのは若い世代によるウチナーアイデンティティーの継承であろう。閉会式の若者宣言を行ったのは世界若者県人連合会代表の比嘉千穂さんである。あわせて、この宣言も確認しておきたい。

「若者宣言」

ウチナンチュであることの誇り。私にとって、世界のウチナンチュの皆さんとで出会わなければ、その誇りを確信することはできなかった。

2012年から多くの方の協力を得てブラジル、アメリカ、ドイツ、フィリピン、沖縄、ペルーで「世界若者ウチナンチュ大会」を開催した。

第7回目となる今大会は、オンラインプログラムを通して祖父母の歴史を振り返り、同じ市町村にルーツを持つ者同士が交流を深めることで、自分自身のアイデンティティーを肯定でき、家族、そして沖縄に対してもさらに誇りに思える機会を創出できたと思う。

コロナ禍で、新しいメンバーと共に大会を作りあげるのはとても大変でしたが、同時に、海を越え、想像を絶する困難にも立ち向かい、人生を切り開いていった1世や先輩たちの存在が励みになった。ありがとうございます。最後となりますが、今後も世界若者ウチナンチュの皆さんと力を合わせられるように努力し、私たちらしく新たなことに挑戦していくことを宣言する。

今大会の特徴は、比嘉千穂さんの宣言の中にもあったように、オンライン開催が行われたことである。これにより、大会の模様を、国境を越えて同時配信することができるようになった。事実、閉会式でも会場と海外がオンラインで結ばれて一体感を持つことができていた。今後はこのようなオンライン参加が増えていくかもしれないが、フィナーレに参加した筆者が感じるのは、やはりこの熱気は会場で感じて共有してほしいということである。もちろん、各国から沖縄に来るためには費用がかかるという制約はあるが、オンラインでは会場の雰囲気はなかなか伝わらないのではないだろうか。「沖縄に来る」ことの意味があらためて確認されることになろう。

閉会式に続いて、グランドフィナーレが行われた。ロックバンドの紫に始まり、ペルー

3世のアルベルト城間さんが率いるディアマンテス、琉球國祭太鼓、Rude-a、そしてBEGINなど、多くのアーティストが歌と踊りを披露した。歌詞に込められた平和への思い、あるいは首里城復興への思いが披露されて、「琉球11.4」が記しているように、参加者全員が「恒久平和への思いをともにし、沖縄から世界に発信する場にもなった」ことは特筆すべきことであった。

やがて、花火が打ち上げられて「世界のウチナーンチュ大会」のすべてが終了となった。次回の開催は5年後の2027年である。その時にも、今回と同様、あるいはそれ以上に沖縄に世界各国の旗が翻り、民族衣装やダンスが披露されること、そしてウチナーアイデンティティーが確認され、共有されることを期待している。

おわりに

「世界のウチナーンチュ大会」は沖縄発展の可能性を大いに持つイベントである。すなわち、そのキーワードは、閉会式で岡田直樹沖縄担当相が語った「ソフトパワー」である。「沖縄10.31」には、大会開幕に合わせて、各国から集まった県人会関係者らを招いた県主催の歓迎レセプションで、玉城デニー沖縄県知事が「世界のウチナーンチュの絆は沖縄が誇るべき財産だ」と歓迎したとあるが、これまでの沖縄の歴史の中で「ヤマト世」「アメリカ世」を経験してきた沖縄が「ウチナー世」を実現することができるような可能性を示していると言えるかもしれない。

それは、国家間関係を意味する「国際的」(international)ではなく、「越境的」(transnational)なネットワークを構築することによって実現できるのではないか。かつて、社会学者の宮島喬は、「地域」概念について、具体的に実体を持つ「地域」に対して、例えば「ケルト」という文化的紐帯によって国境を越えて結ばれる地域を「ヴァーチャルな地域」と定義したことがあった。そこには、既存の国境を越えて、アイルランドやイギリスのスコットランド、ウェールズ、コーンウォール、フランスのブルターニュやスペインのガリシアなどが含まれるが、「世界のウチナーンチュ大会」に顕在化している、「沖縄」という紐帯で結ばれている越境的空間は、それに類似した、まさに「ヴァーチャルな地域」である。それは国家を介在させることなく、政治とは切り離された社会のレベルで実現させることができる。その意味で、沖縄が主体的に構築することのできる空間であろう。そして、「沖縄」を紐帯とする「ヴァーチャルな空間」、「世界のウチナーンチュ大会」などに実体化した空間が実現している今、「ウチナー世」の新たな可能性が確認されたとと言えるであろう。